

2020 8/14

ニュース こう見る

気象学の知識を分かりやすく伝え、災害死ゼロを目指す横浜国大教授

ふてやす ひろのり
筆保 弘徳さん(44)

時のひと

台風に詳しい気象学者で、この分野では多作家として知られる。7月には16冊目となる一般向け入門書「こちら、横浜国大『そらの研究室』 天気と気象の特別授業」(共著)が出版された。大学の外にも知識を広め、気象災害で命を落とす人をゼロにするのが目標だ。

難解なイメージがある気象学だが、分かりやすく伝える筆運びに定評がある。「まず必要なのは空を楽しむ遊心」。講義でも、例えば異常気象の原因探求を犯罪捜査にたとえるなどし、学生の関心に応えている。一方、気象災害で命を落とす人が後を絶たないことを心を痛めてきた。異常気象が人間の想定・想像を超えていく時代。災害大国で生きるには正しい知識、危険を避ける判断力がある。

釜石市出身、岡山市育ち。

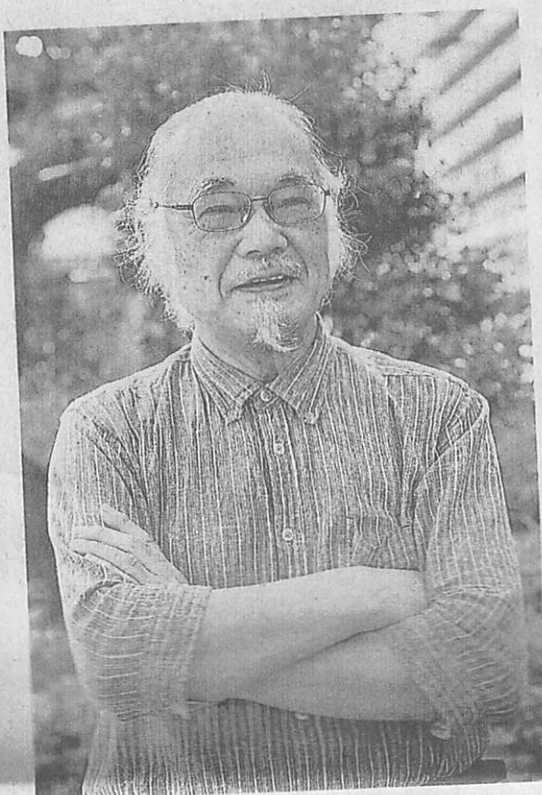


だが今はまだそれらが足りない。一因は大学入試にあると考えている。気象学を含む「地球(地球科学)」を受験科目に入れない大学が多く、結果として多くの高校が生徒に生物、化学、物理のいずれかを選択させている。そもそも学校に地学専門の先生がほとんどいない。例えば、東京都教育委員会は、中学・高校共通理科教員の募集を「物理・化学・生物」に限っている。「高校で地学を学んだ人が増えれば、社会全体で危険を回避する力が高まる」かもしれない。でも一朝一夕には変わらない。それなら本を書き、「つなぎ」にしようと考えた。気象学を理学部などでなく、教育学部で教える立場ならではの発想だろう。岩手県

を交付す。印形ヲ持チテ直グ役場へ来ルベシ。こんな通知を受け、数え年19歳で叔父さんは戦地に行ってしまった。

その後、「故陸軍上等兵〇〇君は雄渾なる今次作戦に勇躍参加するも幾多の山

た人々のおかけだ。75回目の終戦記念日を、戦争の悲惨さや平和の尊さを考える機会にしたい。



はらだ・けいいち 1948年生まれ。日本近代史、地成と軍隊、軍部・舞臺などを研究。著書に「日清戦争論 日本近代を考える足場」など。共著に「日清戦争 戦地の少女の軍隊」。

戦争から連想する死は、兵器による負傷からのものが常識的だろう。日本近代最初の戦争である日清戦争では、病死者のほうが多かったことがよく知られるようになってきた。戦死者1417人に対し、病死者1万1894人と、参謀本部編纂の



原田 敬一氏

724

「日清戦史」(1904〜07年刊)は報告する。病死者のほとんど(万2336人)は、1895年5月から11月までに台湾で亡くなった。清戦争開始前に設置された大本営止は96年4月1日。広義の日清戦争は、94年6月〜96年4月とする。筆者たちの考えだが、どうなるかなら日清戦争で病死者のほとんどは「日清戦史」に記されていない。戦地の野戦病院への入院患者は5419人(軍人・軍属の合計)。

戦地の

規感染数の減少が続く。ヒ府・市や業界で、スクなのに対策が不十分な業種」については、マニユアルを改善してほしい。

感染リスクが残ると言われ、その対策を確立してほしいところだ。